

学校紹介

School

工業高校にできること

学校法人名工学園 名古屋工業高等学校長 林 文敏

1. 本校の紹介

(1) 歴史

大正初期、名古屋市内に開校していた工業学校は、昼間の学校がわずかに3校、勤労青少年が学ぶことのできる夜間課程を持つ学校は、電気に関して学ぶことのできる1校のみであった。

このような状況を憂えた創立者が、「我が国の将来は工業立国にあり。そのためには、技術者を養成せねばならぬ」という遠大な構想の下、働く青少年を対象に、土木科と機械科の2科を持つ夜間の学校「名古屋工科学院」を、大正9年（1920年）、名古屋市中心部に創立した。

2年後には建築科が設置され、5年後には現在地（昭和区円上町）へと移転した。昭和4年、甲種工業学校として認可を受けると同時に、「名古屋工業学校」と改名。昭和23年の学制改革により、「名古屋工業高等学校」として発足した。その後、時代の流れに即して、昭和38年に工業化学科（平成5年に募集停止）、昭和59年に電気科、平成5年に情報技術科がそれぞれ設置された。土木科、機械科、建築科には定時制課程も併設されていたが、昭和49年を最後に募集は停止された。

平成12年には、学園創立80周年を記念して、免震構造8階建ての校舎が完成した。戦前の一時期、商業学校を併設したことがあるものの、創立以来現在まで104年間、普通科を持たずしかも男子校という、いまだき珍しい学校である。これまでの卒業生は3万7千人を超え、



校舎全景

各方面で活躍している。

(2) 現在

土木科、機械科、建築科、電気科、情報技術科の5科を有する総合工業高校である。特に、土木科、建築科に関しては、東海4県下で他にこの2つの科を設置している私立の高校はない。年によって入学者数は変動するが、ここ最近の一学年は250名前後。名古屋市外はもとより、岐阜県や三重県から通う生徒もいる。中学生の段階で科を選択することは難しいとの判断から、昨年度より、土木科と建築科、電気科と情報技術科とをそれぞれ一括して募集（建築・土木コース、電気・情報技術コース）し、2年次からそれぞれの科に分かれるようにしている。

以下の3つが建学の精神である。

- 1) 着実な修学
- 2) 心身の健全
- 3) 礼節を尚ぶ

これらを受けて、資格取得、皆勤、身なりを整えること、挨拶の励行に重きを置いている。

皆勤に関しては、卒業式で3か年皆勤した生徒の名前を読み上げているが、その数は毎年、卒業生全体の3割に上る。挨拶に関しては、社会人の基本でもあることから入学当初から指導力を入れており、学校にいらっしゃった方から、「気持ちの良い挨拶が返ってくる」と度々お褒めの言葉をいただいている。

(3) 進路

卒業生の7割から8割が就職する。本校の104年の歴史を象徴するかのごとく、愛知県内各所から様々な業種・職種の求人をお願いしている。県外からの求人もあるが、もともと愛知県は地元志向が非常に強く、県内からの求人が潤沢にあることもあり、県外に出ていく生徒はほとんどいない。残りの3割ほどの生徒が4年制大学もしくは専門学校への進学者である。進学に関しても、県内ほとんどの私立大学・専門学校から、文系理系問わず指定校推薦枠をいただいている。

(4) 部活動

かつてはラグビー部が全国大会の常連であったが、現在は、レスリング部、ボクシング部、ボウリング部が頑張っている。特にボウリング部は、昨年末行なわれた文部科学大臣杯第29回全国高等学校ボウリング選手権大会で優勝することができた。他に、柔道部や卓球部が近年力をつけてきている。両部ともに県内にそれぞれ超強豪校があるため、県で1位になることは難しいものの、各種大会で毎回県大会の上位に食い込んでいる。

文化系の部活動では、ロボット部や無線部、空飛ぶ車いす同好会が活発に活動している。特にロボット部は、愛知県工業高校生ロボット競技大会で毎年上位に食い込んでおり、過去15回の大会中3回優勝している。

2. 資格取得

(1) 歴史

生徒の資格取得に力を注ぎ始めたのは、昭和

59年度からである。これは、昭和57年より始まった“愛知県高等学校職業教育技術認定事業”に端を発している。この事業の目的は、

- 1) 職業資格の取得を通じて、専門分野の基礎的・基本的な技術・技能を習熟させる
- 2) 学習意欲を高め、目的意識をもって充実した学校生活を送らせる
- 3) 将来にわたって豊かな職業生活を営むことのできる資質を身に付けさせる

であり、在学中に国や公的機関等が実施する職業資格試験や検定試験等のうちから、一定条件以上の資格等を取得した場合に、知事から顕彰されるというものである。

中学校では自分の力を発揮できず、自分に自信が持てない状態で入学してきた生徒たちに、自分たちでもやればできるんだという自信を付けさせて、社会へ送り出すことができればという教員たちの思いに、知事顕彰という名誉が得られることが加わって、資格指導がスタートしたと言える。初年度は“1年次での計算技術検定試験4級全員合格”を目標に掲げ、さらに電気科では計算技術検定試験3級を、機械科では危険物取扱者試験丙種を、と科毎に挑戦する資格試験を決めた。その結果、昭和62年の卒業時には、卒業生の70%を超える生徒が知事顕彰を受けることができた。

その後、科毎に受検する資格試験を見直すとともに指導者を養成、また平成13年度から始まった全工協主催のジュニアマイスター顕彰制度が後押しとなって、生徒たちの資格取得に拍車がかかった。第二種電気工事士合格者ランキングの上位やジュニアマイスター顕彰認定数上位校に学校名が載るようになり、生徒の一層の励みになっていった。

(2) 現時点での取組

これまでは、ともかく資格取得をということで、所属する学科に関係なく全校生徒に、危険物取扱者試験乙種第4類、計算技術検定試験3

級、情報技術検定試験、日本漢字能力検定の4つの資格取得を挑戦させていた。しかしながら現在、在学中ならびに卒業後、真に生徒のためになる資格を取得させようと、それぞれの科で受検する資格試験の見直しを図っているところである。例えば、機械科の生徒は全員、一年次に国家技能検定3級機械検査作業を受検することとした。測定器具の取扱いをしっかりと身に付け、2,3年次の実習時に活かそうとするものである。この結果、現在全校生徒が受検しているのは、危険物取扱者試験乙種第4類のみとなった。

(3) 第二種電気工事士試験

第二種電気工事士試験の受検は、電気科一期生が2年生となった昭和60年から始まった。当初は指導のノウハウもなく、最初の年は学科試験にはそこそこの数の生徒が合格したものの、実技試験の合格者はゼロという惨憺たるものであった。そこで合格実績をあげている学校を訪問して指導方法を伝授してもらったり、平成元年度からはそれまで2年次に受検していたものを1年次に変更したり、平成5年度には情報技術科ができたこともあり、着実に合格者が増えていった。電気科・情報技術科以外の生徒からも受検をしたいという声が上がリ、校内での指導体制も確立できてきたことから、平成10年度からは建築科、平成12年度からは機械科、平成16年度からは土木科の希望者も受検するようになった。またこの年度からは、2年生の機械科の中に電気工事士試験を受検するクラスを設置した。現在は、電気・情報技術コースの生徒は1年次に全員が、機械科、建築科、土木科の生徒は希望者のみが受検している。

(4) “とび”職種への挑戦

今まで、国家技能検定のうち、“機械製図”、“機械検査”、“普通旋盤”、“フライス盤”、“大工工事”、“曲げ板金”、“左官作業”を、希望する生徒が受検していたが、それらに加え、令和



技能五輪全国大会出場生徒

2年度から“とび”への挑戦も始めた。そんな中、中学校時代は文化系の部活動に所属しており、体力も自信もない建築科の2年生の生徒が、ともに練習してきた仲間2名と助け合い、また企業の方から熱心な指導を受けることにより、愛知県予選で優勝することができた。そして、昨年11月に千葉県で行われた第60回技能五輪全国大会に、愛知県代表として出場した。入賞はできなかったものの、「全国大会に出場でき、とても良い経験ができた。現地で各企業の指導者の方がいて、『安全に作業を』という部分を細かく指導していただき、とても勉強になった。たくさんの職種の選手が本気で戦っている姿を見て、高校生たちにこの素晴らしさを伝えていこうと思った。」といずれも本人の弁である。卒業生の中には、就職先の企業から技能五輪全国大会に出場した者はいたが、現役生としての出場は今回が初めてであり、生徒数の減少が続く中、うれしい出来事となった。

3. 日本の“ものづくり”

(1) 子供たちを取り巻く環境の変化

今から50年以上前の子供たち、特に男児の遊びといえば、身の回りにあるものを使って、工夫して何かを作ったり、あるいはプラモデル

を組み立てたりというのが一般的だった。複雑な動きをするものがあれば、ネジを緩めて分解し、中のしくみを調べたりすることもできた。中学校に上がれば技術の時間に、製図・木材加工・金属加工・電気工作と、様々な“ものづくり”を体験できた。

今の子供たちはどうか。画面を眺めているだけで、なんでもできてしまう。しくみを調べようにも、中には基板が並んでいるだけ。中学校の技術の時間は削減された上に、「材料と加工の技術」、「生物育成の技術」、「エネルギー変換の技術」、「情報の技術」と、その内容は工業の分野だけでなく多岐にわたっている。こうした子供たちに、進路選択の上で“工業高校はどうだ? ”、“ものづくりに興味はあるか?”と尋ねて、果たしてどれだけの中学生が手を挙げるだろうか。建築だ、土木だ、電気だ、機械だと言って、果たして何人の中学生にその違いがわかるだろうか。

(2) 日本の“ものづくり”は今

第二次世界大戦終了後一時期は、「安かろう悪かろう」が日本製品の代名詞だった。しかしその後の技術革新で、ポータブルオーディオプレーヤーや低公害エンジン等世界に誇れる製品をたくさん生み出した。そんな日本であったのに、今、様々な業界で偽装、不正、改ざんが相次いでいる。一貫して“ものづくり”に励んできた超一流と言われる会社においてでさえも、データ不正がまかり通ってしまっている。“ものづくり日本”、“世界に誇れる日本の技術”、誇りは、いったいどこへ行ってしまったのか。これでは、工業高校へ来て技術を学び、習得した技術を生かして“ものづくり”の企業へと中学生たちを導くことはできないし、「“ものづくり”を学びに工業高校へ来てください」と、誘うこともできない。

4. われわれにできること、やらねばならないこと

少子高齢化が進み人口が減少しても、人々が安心・安全に暮らしていくためには、生活関連のインフラを整備していかねばならない。それを担うのは工業高校を卒業した中堅技術者である。にもかかわらず、工業高校は今、子供たちからも保護者からもソッポを向かれている。今一度、工業高校に生徒を集めなければ、日本は今後この先、立ち行かなくなってしまう。

今一度“ものづくり”の楽しさを子供たちに知ってもらおう。元来が器用であることに加え、工夫を凝らすことで、さまざまな“ものづくり”に励んできた日本。“からくり”を用いて省力化・効率化を進めてきた日本。そうした日本の持つ技術のすばらしさを子供たちに向けてPRする場を、産業界には設けてもらいたい。

一方で我々工業高校が、“ものづくり”がもっと身近な存在となるよう、子供たち向けに工作教室やプログラミング教室等を開設する。さらには、生徒たちの知識を活かして地域のお年寄りたちを対象にしたスマホ教室を開いたり、校内の実習施設やスポーツ施設を開放したりする。また、高齢化が進む中、家の中のちょっとした困りごと、家具や建具を直したり、高い所の電球を取り替えたり、といった御用聞きのような役割を、生徒たちの知識や力を用いて行う。生徒たちが地域の人と共に行動することで、工業高校は地域になくってはならない存在となる。

今は、生徒が集まらず苦しい状況ではあるが、子供たちに向けて“ものづくり”の楽しさを積極的に発信していくとともに、地域に愛される学校を目指す。そして、「名古屋工業高等学校」という素晴らしい校名を与えられた本校から、今後も愚直に、将来の日本を支えていく人材を輩出していこうと考えている。